

新潟県における巨樹

石 沢 進



巨樹・巨木林を訪ねてそれに接する機会に遭遇した時、人によって感じ方は様々なのである。長年生き続けてきた巨樹の前に立つと、その大きさに圧倒されて、しばし動かず、敬虔な感動を覚えることが多い。また、多年風雪にさらされてきた老木に接した時、心にわだかまっていたことがらも、何と小さなことではないか、と心の休まりと落ち着きさえ感じさせられたりする。恩師天野幸治先生は、老齢になってからであるが、老木の存在を知るとわざわざ訪ねて行く。「よくもこんなに生きたものだと思う。太い枝を地面に殆ど平行に出しているようなのを見ると、こんな重いものをよくも支えているなどと思う。夏の暑い日など、夥しい数の葉や小枝の先々が萎れないのを見ると、幹の中を水が音をたてて吸上げられているような気がする。大木をみに行くと、いつもこんな風に圧倒されたような気持ちになって帰ってくる。」と記され、生命力の偉大さに感動されている。

単木でなく、大きな木々が茂っている自然林の中にたたずんだ時も、最初恐怖感に襲われるが、じっくりと時間をかけてとどまると、静寂と安堵を感じる人が多い。

風雪に耐えて生き続けている巨樹・巨木林の姿にもう少し身近に接し、多忙で忙殺されている現代社会から逃れて、しばらくとどまって考える余裕をもちたいものである。おそらく、長い年月にわたって自然に逆らわず、生き続けてきたこのような遺産は、現代の人々に安らぎを与えてくれる貴重な存在であると思っている。

ここでは新潟県における巨樹・巨木林について、その実態の概略と特色をまとめて紹介したい。

全国における巨樹・巨木林との対比

巨樹・巨木林の調査が環境庁(1991)によって全国的に進められ、その成果が報告書としてまとめられている。それによると新潟県は都道府県別の測定した巨木本数が多く、2580本であり、茨城県の2687本に次いで第2位である。ちなみに全国の巨木総数55798本であり、その内新潟県の巨木が4.6%を占めている。さらに全国巨木リストで上位60本の中に新潟県の巨木が3本含まれている。すなわち、15位にスギ(三川村将軍杉)、38位にカツラ(塩沢町薬照寺の大カツラ)、44位にスギ(糸魚川市杉の当の大スギとシナノキ)である。また、全国の樹種別巨木リストで上位10位までに入っている新潟県の巨木には、イチョウの7位(五泉市乳銀杏)、カツラの5位(塩沢町薬照寺の大カツラ)、ケヤキの10位(柏崎市鶴川神社大ケヤキ)、サクラの10位(両津市北小浦の与六郎桜)、スギ2位(三川村将軍杉)および9位(糸魚川市杉の当の大ス

ギ)、ブナ 4位(佐渡郡佐和田町真光寺 仏峠のブナ大樹)、マツの 6位(黒川村の傘松)などである。これらから新潟県には全国にも誇れるような巨樹の多いことがうかがえる。

巨樹になる植物の種

全国の巨木の樹種のうち最も多いのが1位スギ、次いで2位ケヤキである。この傾向は新潟県でも同じであり、また北陸3県(富山、石川、福井)と山梨県でも同様である。しかし、長野県ではケヤキの方が多く、スギが二番目と逆転している。新潟県では3位イチョウ、4位クロマツ、5位アカマツ、6位カツラ、7位モミ、8位タブノキ、9位トチノキ、10位スダジイであるのに対して、全国では3位クスノキ、4位イチョウ、5位スダジイ、6位タブノキ、7位ムクノキ、8位モミ、9位エノキ、10位クロマツである。つまり、新潟県ではカツラやトチノキのような樹種の巨木が多いのに対して全国ではクスノキ、ムクノキのような樹種が上位を占めている。新潟県と近隣の北陸3県(富山、石川、福井)と甲信2県(山梨、長野)で比較してみると、新潟県と北陸3県とも10位までの樹種にほぼ同じものが含まれている。勿論順位は異なり、石川、福井ではタブノキ、スダジイのような常緑樹の順位が高く、カツラ、トチノキのような落葉樹は順位がむしろ低く、10位以下である。内陸の甲信2県ではタブノキ、スダジイ、クロマツのような常緑樹の巨木がないか、あっても稀である。このような比較から新潟県には全国で順位の高いクスノキ、ムクノキ、また石川、福井で順位の高いタブノキ、スダジイの巨木が少なく、カツラ、トチノキ、その他ブナ、ミズナラといった落葉性の巨木が多い傾向があることが指摘できる。クスノキ、ムクノキは県内では自然に分布していない樹種であり、タブノキ、スダジイは海岸地方の低地に限って分布している樹種である。一方カツラ、トチノキは山地に広く分布している樹種である。

また、県内にも自然分布(古来からのものを含む)して巨樹になっている樹種が44種であり、県外の自生と見られるもので、県内では明らかに植栽されて巨樹になっている樹種が15種、明らかに外国から移入して巨樹になっている樹種が7種である。つまり、県内に自然分布する樹種の巨木が2/3を占めていることになる。しかし、自然林の中に巨樹の状態が存在することは少ないようで、多くの巨樹は人目につき易い場所、神社や寺の樹叢などにある。

以上のことから国外から移入したイチョウのように県内でも巨木に成長しているものもあるが、県内に自然に分布している樹種に巨木が多いことがあげられる。自然の環境条件を反映して大木に育っていることを示すものと思われる。

樹種とその大きさ

新潟県の大きさを20位までの巨木の樹種をみると、スギ9本、ケヤキ6本、イチョウ3本、カツラ2本である。また、測定した巨木もスギ1220本、ケヤキ693本と圧倒的に数が多い。イチョウは123本、カツラは58本で数も少ない。

このように新潟県の巨樹は、スギが圧倒的に多数を占め、しかもその樹幹も太いものが多い。最大のもは東蒲原郡三川村の將軍杉で、前記のように全国でも第2位の大きさである。次いでケヤキの693本と多く、また太いものがある。かつて東頸城郡松之山町のケヤキは全国第1位であったが、数年前の豪雪により、樹幹の一部が破損してしまい、以前の雄大な姿が見られなくなり、残念なことである。

県内生自の樹種でエノキ24本、ミズナラ10本、サクラ類17本、イタヤ類9本の巨樹が記録されている。いずれの樹種も県内では広く分布しているので、これら以外にも多くの巨木が存在する可能性がある。

県内で比較的広く分布している植物であるのに巨樹が少ないものがある。クリは六日町の幹周320cmが1本、クヌギは村上市の310cmが1本、アカシデは柏崎市の325cmが1本、ナラガシワは神林村の322cmが1本などで、これらは県内ではいずれも人里近いところに分布し、見慣れた樹種であり、特色もないので特に保存の対象にならなかった可能性もある。クリは古木になると枝枯れが目立つようになるので、ケヤキのように大木になっても生き生きした感じを与えないし、美観を伴わない。また、材としての利用も劣っていることから、積極的に保護の対象にならなかったようにも思う。上川村弘川の日光寺周辺には、クリの古木がかなり多数あり、現在でも散見するが、ほとんど枯死に近いか、枯れ木の状態であるが、クリそのものはかなりの巨樹になる。

巨樹の中にシナノキ3本、クロベ1本、ゴヨウマツ4本、ホオノキ3本、ハリギリ3本の記録があるが、その数も以外に少ない。これらの樹種は人里近くよりはむしろ内陸の深山の自然林に広く分布している。従ってこれらの樹種の巨樹は、人里はなれた山中に存在している可能性があり、今後の調査によって追加されるだろう。

自然林の中の巨木林

自然林の中、あるいは一箇所に巨樹がまとまって分布するところとしては、岩船郡山北町の宮堅八幡宮と菅名岳があげられる。菅名岳の巨樹については別に解説があるので、参考にされたい。宮堅八幡宮には姥杉の幹周1020cmの他スギ12本、カヤ551cmと400cmの2本、アサダ332cmの1本、トチノキ401cmの他3本、ケヤキ450cm2本の他6本のそれぞれの巨木が樹叢に生育し、いろいろの樹種を混じえて密度の高い状態でみられる点では県内随一のところである。この他三島郡出雲崎町小木ノ城山には幹周300cmを超えるケヤキが13本、アカイタヤ380cmのもの1本、エノキ325cmのもの1本がある。今回の調査ではリストアップされていないところである。栃尾市の杜々の森にもスギやブナの巨木がみられる。この他村松町の慈光寺には自然のままではないが、スギがまとまって巨木になり、鬱蒼とした樹林がある。

また、刈羽郡西山町、佐渡両津市の両尾、佐渡郡相川町二見などにスダジイの樹叢があり、県内では注目すべき貴重なところである。

県内稀産または分布限界の巨樹

新潟県ではほぼ分布の北限になっている常緑樹にウラジロガシ、スダジイ、アカガシなどがある。ウラジロガシは粟島で、スダジイは佐渡で、アカガシは日本海側では加治川村金山付近で、それぞれ分布の北限になっている。

県内のスダジイの巨木は、比較的多く33本も記録されている。その内、最大のは糸魚川市蓮台寺「光照寺のシイノキ」で幹周り 700cmである。次いで、両津市両尾の520cm(主幹の太さで、幹周り 762cm)、出雲崎町工茂「宇奈具志神社の大椎」515cmである。

ウラジロガシは南蒲原郡栄町矢田光善寺 490cm、村上市羽黒神社 340cm、柏崎市社寺340cm、刈羽郡小国町苔野島323cm、三島郡和島村鹿島神社 303cmの5本が記録されている。北限の粟島でも根元周囲 140cm、高さ60cmで3つに分れ、それぞれ76、81、62cmの大きさに生長している。

アカガシは栃尾市 700cm、柿崎町上輪 497cm(主幹420cm)、中条町400cm、黒川村330cmの太さの巨樹がある。

このように新潟県においてほぼ分布の北限にあたる常緑樹が、巨木になり、その個体数が比較的多いことは驚きである。身の周りにまれにしかない樹を、大切にすることによるものと思われるが、北限地域でどの程度の大きさにまで生長するかを知る貴重な存在である。

一般にヤマザクラと称しているものにはカスミザクラ、オオヤマザクラを含んでいるが、ヤマザクラそのものがあり、それらと区別されている。そのヤマザクラが県内において日本海側の北限になっている。県の南西部の頸城地方と佐渡に分布している。佐渡の北小浦の巨樹はそのヤマザクラであり、その付近で北限となっているのに巨樹に生長していることは意義深いことである。しかも全国でもサクラの巨樹の第10位に位置づけられている。

県内で分布が比較的稀であるのに巨樹になっている樹種にアベマキ、アサダなどがあげられる。アベマキは県北部の低海拔地域に分布している。巨樹には中条町の440cm、村上の石船神社の313cmのものがある。

また、アサダは前記山北町の332cmの大きさの巨樹1本が記録されている。アサダはこの他、直径100cmを超えるような巨木になっていないが、東蒲原郡上川村面倉の八坂神社には、本種がやや密に生育しているので、県の天然記念物に指定されている。

巨樹の樹齢

巨樹の年齢は樹種や生育地の環境などにより、個体差が大きいと思われるので、推定が難しい。報告書では 200-299年と300年以上と推定したものがほとんどである。ここでも県内の巨木の樹齢に関する資料がほとんどないので、今後、資料の整理や蓄積をまって検討する必要がある。一例を示すと小木の城山の山頂部のケヤキが台風でたおれてしまったが、その幹の半径が 72cmであり、年輪が300以上である。伐採や

巨樹が被害を受けて倒れた際には、それぞれ記録を取っておくことが望まれる。

巨樹・巨木林の保護

今回の調査では直径で100cm以上を対象にしているが、木の種類によっては多年の年月が経過しても太くならないものもある。しかし、寿命が長く、老樹となっている樹種がある筈である。どのような樹が、どれだけの寿命があるかは明らかではないが、老樹と思われる樹種、つまり木本となる全てのものについて大きくなっていると思われる個体を対象にした調査も必要であろう。それらも同様に保護の対象にすべきであり、貴重な存在である。

単木として守っていくことも大切であるが、巨木が多く分布する地域全体をそのまま保護しておく意義は極めて大きい。その生育地における樹の生長の実態を知る大切な資料となると共に、古来からの自然状態における森の営みの多様な実態を浮彫りにできる宝庫の存在でもある。スダジイ、ヤマザクラなどのように分布の北限でありながら大木になっているのは驚きであり、その保護には一層力を入れておきたいものである。

新潟県における巨樹・巨木林の実態も上記環境庁の調査によって、その概略が把握されたことであり、その結果を広く県民に知って頂くことは大変有意義なことである。このような巨樹・巨木林を通して、身近な自然について関心もたれるようになることは極めて喜ばしいことである。そして、関心が高まることにより、これに記録されたもの以外の新たな巨樹・巨木林の存在が明らかにされることを期待する。それというのも新潟県は面積が広く、地形が複雑であるため、容易に調査のできなかつた地域、特に山地の人里から離れた自然林の中の巨樹・巨木林の存在が実態としてははっきりとしていないように思われる。このような報告書の資料と比較しながら調査を進め、全容を明らかにすることが望まれる。

佐渡の植物調査に出掛け、道路脇の家の前の巨木に感心して拝見した際、所有者は「木材業者がこの巨木を売ってくれないかと立寄って申出があるが、先祖から大切にしている樹であるので、売るつもりはない、と断っている。」との話を聞いたことがある。巨樹の多くは所有者の熱意によって支えられているように思う。長年生きてきた樹々を大切に保存するための対策も必要になろう。樹々が大きくなる過程、つまりその樹の歴史は、年輪に刻み込まれ、現在生存している人々よりもずっと以前のことをしっかり記録しているという。巨木は安易に材木にしないよう願いたい。

また、現在の巨木だけを大切にすればだけでなく、大きくなりつつある木々の保存にも心掛けたいものである。各市町村ごと、できれば各集落ごとに、その地方を特色づける「おらが村の巨木林」を育成し、「ふるさと」の自慢の森一やすらぎの森一が生れることを切望する。

[新潟の巨樹 新潟県環境保健部環境保全課(1992)に掲載]